様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４５３

研究課題名（和文）情報欠落文における主観性介入に関する日仏英対照言語学的研究

研究課題名（英文）Contrastive Study between Japanese, French and English on the Intervention of Subjectivity in Sentences without information

研究代表者
阿部　宏（ABE, Hiroshi）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：１０２１２５４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,600,000円、（間接経費）　1,080,000円

研究成果の概要（和文）：　同語反復文，矛盾文，自明文，確認文，メタファー文などは情報価値がゼロ，あるいはゼロに近く，情報伝達機能という言語の常態を逸脱した表現ともいえるが，頻度も高く，その意味作用においては各表現を通じてある種の共通性が見られ，また通言語的にも類似性が観察される．
　本研究では，これらの文の意味生成メカニズムについて，主観性仮説の点から解明を試みた．その結果，これらはいわば枠組みだけの文であり，ゼロ化された情報部分は，「真実性」，「望ましさ」，「実現要請」という三種の主観性のいずれかによって埋められ，結果的に意味が生み出される，ということを明らかにした．

研究成果の概要（英文）：Tautology, contradictory sentence, truism, confirmation sentence, metaphor sentence etc. have no or almost no information. In this sense, these sentences are deviate from the normal use of language that consists of transmission of information. But the frequency of these sentences is high. And there is some kind of commun feature in semantic generative process and the similarity through languages. We have researched the semantic generative process of these sentences from the point of subjectivity hypothesis. We have made clear that these sentences are simply the frame of sentence. Information, reduced to zero, is replaced by one of three subjectivities : factuality, desirability and demand of realization. It is this process that produces the meaning.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：意味論

キーワード：同語反復文　矛盾文　主観性

１．研究開始当初の背景

同語反復文，矛盾文などを代表とする情報欠落文は出現頻度が非常に高いものでありながら，いずれも周辺的な言語現象と見なされたためか，これまで研究者の注目を惹いてこなかった．したがって，同語反復文を除いて研究はほぼ皆無であった．また，これらの文の意味生成にある一貫した原理が働いているとの指摘もこれまでなされていなかった．

同語反復文については，伝統的に語用論（Grice 1975，Levinson 1983）と意味論（Wierzbicka 1987）からのアプローチがあり，近年においても前者（Gaudin-Bordes 2008 など）や後者（Schapira 2000，2005 など）の系譜に分類される研究が発表されている．これに対し，新たな理論的枠組みからの分析も行われはじめている．プロトタイプ意味論（坂原 1992, 2002, 藤田 1998, 1990, 1993），Ducrot 系譜の言語内論証理論（大久保 1999，大久保 2000，Okubo 2003），Fauconnier・Recanati 系譜のコンテクスト主義（Sakai 2009），疑似総称名詞句説（川島 2010），主観性仮説（Abé 2006, 阿部 2008, Abé 2009，阿部 2009），などである．

研究代表者は，Bally や Benveniste にはじまるフランス語学における主観性概念，鈴木朗の「心の声」や時枝誠記の言語過程説など国語学の底流にある主体性概念，アメリカ合衆国において近年盛んな認知意味論，文法化理論，主観化仮説などに発想を得ながら，日本語，フランス語，英語の種々の言語現象，特に程度・比較表現起源の熟語（plus ou moins, qui plus est，encore moins,「多かれ少なかれ」,「多少」など）における尺度の主観化について研究成果を発表し，言語における主観性，その中でも特に「望ましさ」と「実現要請」概念の存在と重要性について指摘してきた．その過程で，一連の情報欠落文についてもまた，この主観説仮説の観点からの考察が有効であることに気づき，同語反復文，矛盾文を中心に研究を開始し，国際学会，国際誌を中心に研究成果の発表を行ってきた．

この着想の根底にある考え方は，「言語現象はそれだけで自立したものではなく，その基盤に事態に対する話者の判断，つまり主観性の働きがある．主観性は通常は言語の情報伝達機能の陰に隠れて目立たない．しかし発話の情報価値をあえてゼロ化することによって顕在化させることができる．これが情報欠落文において生じている現象である」というものであった．

２．研究の目的

情報欠落文には，以下のようなものがある．

a) 「同語反復文」（X が X だと主張）：
「ネコはネコだ！」，Un chat est un chat！（フランス語，以下「仏」と記す）．

b) 「矛盾文」（X が X でないと主張）：
「（高度な知的能力や柔軟な動作が可能なロボットに，感嘆して）このロボットはもはやロボットではない！」, Ce robot n’est plus un robot！（仏）．

c)「自明文」（周知のことを主張）：
「（ある音楽について）これが音楽だ！」，Ça, c’est de la musique！（仏）．

d)「確認文」（周知のことを説明）：
「盗作は犯罪です．」，Un plagiat, c’est un crime.（仏）．

e)「メタファー文」（X が Y であると主張）：
「この家は美術館だ！」，Cette maison, c’est un musée！（仏）

これらの文は情報価値がゼロ，あるいはゼロに近く，言語活動の常態を逸脱した表現ということにもなろうが，頻度も高く，その意味作用においては各表現を通じてある種の共通性が見られ，通言語的にも興味深い類似性が観察される．このことは，これら情報欠落文に共通な意味生成基盤が存在することを示唆するものである．本研究は，日本語，フランス語，英語の対照研究を通じて，情報欠落文の意味補完メカニスムの解明をめざしたものである．

３．研究の方法

近年の意味論，語用論，認知科学，文法化研究，主観化仮説，言語習得研究は，個別言語の語彙体系や文法機能の基盤に言語普遍的な外界認知のレベルがあることを明らかにしつつあるが，その中でも言語現象に潜在する発話者，いわゆる主観性概念に注目が集まっている．しかしながら，主観性への考察は，認知意味論で多く問題とされる視点のありかた，またその各国語における相違（例えば，「英語＝状況外的，日本語＝状況内的」，など）の研究，あるいはモダリティ研究の中心テーマである「真実性」判断の分析，に矮小化されてはいないだろうか．「真実性」と並んで，「望ましさ」,「実現要請」などの主観的判断が言語現象に深く関与している可能性があるが，これらに関する総合的考察は国内外においてほぼ皆無であり，具体的データに基づいた詳細な分析と，統一的な仮説の構築が待たれている．

日本語，フランス語，英語の用例を広範に収集，特に，情報欠落文は一般に文章語よりも口語での頻度が高いので，口語の自然な発話例を，文脈・状況を含めて収集した．

同語反復文について得られた成果を矛盾文と自明文の分析に適用し，主観性全体について総合的仮説を構想した．

研究論文や研究書を通じて，意味論，語用論，文法化，認知科学，言語習得関連の成果について考察した．意味作用一般について，現在までの研究史を概観するとともに，主観性仮説の点からの批判的考察を試みた．

４．研究成果

情報欠落文においては，語彙素，形態素，文法の積み上げが，文の意味の成立にほとんど貢献していない．しかしながら，文は意味を帯び，またその意味成立においては，ある統一的原理が窺われ，通言語的にも共通性が観察される．したがって，情報欠落文が意味を産出するメカニズムの解明は，個別言語の意味分析にとどまらず，意味研究の根幹に直結する問題であるが，成果として以下が明らかとなった．

情報欠落文の意味解釈が語彙素や形態素の組み合わせにより意味論的に形成されたものでないことは自明であるが，他方，解釈が収束的であるという観察は，これらの意味は文脈・発話状況との関係から語用論的に生み出されたものでもなく，事態に対する発話者の主観的判断のレベルに基づいたものである．主観性には，「真実性」，「望ましさ」，「実現要請」の三種がある．

情報欠落文の意味産出に文脈・状況の寄与があるとすれば，それは当該の文に関与する主観性がどの種の主観性か，を明確化する働きだけである．情報欠落文とは，あえて情報部分をゼロ化した骨組みだけの文である．しかしこのゼロは主観性によって補完され，文は主観性を直截に表現する道具として機能する．

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①Abé, Hiroshi, A propos de l'hétérogénéité de la phrase contradictoire en français, *Actas del XXXVI Congreso Internacional de Lingüística y Filologiá Románica* (Ed. By Casanova, Emili / Calvo, Cesareo), Tome V, De Gryuter, pp. 323-329, 2013.

②阿部宏，「空間移動表現の意味拡張について　「くる」と venir の場合」，『川口順二教授退任記念論集』（喜田浩平編）（慶應義塾大学文学部），Web 論集（http://web.keio.jp/~kida/hommage_kawaguchi.pdf），pp. 1-13，2012 年 12 月 26 日．

③阿部宏，「川口氏の「スーパー・プレディケート」仮説について」，『藝文研究』（慶應義塾大学文学部）第 103 号，pp. 243-228，2012 年 12 月 1 日．

④ Abé, Hiroshi, L'Étude contrastive franco-japonaise sur la "désirabilité"，『文化』（東北大学文学会）第 75 巻第 3・4 号，pp. 105-124，2012 年 3 月 24 日．

⑤ Abé, Hiroshi, Une analyse de la structure du type "X n'est pas X. C'est Y."，『東北大学文学研究科研究年報』第 61 号，pp. 170-148，2012 年 3 月 1 日．

〔学会発表〕（計５件）

①阿部宏，2012 年 10 月 21 日，「バンヴェニストのソシュール批判 - Saussure et Benveniste après un demi-siecle -」，日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ「ソシュール没後 100 年 - 100 年の言語学」（於神戸大学）．

②阿部宏，2012 年 9 月 23 日，「トートロジと矛盾文における意味構築について」，「トートロジ・ワークショップ」（於東京大学・駒場）．

③阿部宏，2011 年 11 月 19 日，「フランス語における矛盾文と疑似矛盾文について」，「否定をあらわすもの・否定があらわすもの」（フランス語談話会・シンポジウム）（於京都大学）

④阿部宏，2011 年 8 月 25 日，「日本語における「XはXでない」型の矛盾文の分析，A analysis of the "X isn't X" type of contradictory sentence in Japanese」, 14th European Association for Japanese Studies International Conference，Tallinn University (Esotonia)．

⑤Abé, Hiroshi, 2011 年 6 月 24 日，「A propos de la subjectivation de l'échelle dans *PLUS QUE*」，Quatrième colloque international de l'Association Française de Linguistique Cognitive (Lyon, Université Lyon II)

〔図書〕（計１件）

①阿部宏監訳，前島和也・川島浩一郎訳，エミール・バンヴェニスト『言葉と主体　—一般言語学の諸問題—』，全 302 頁），岩波書店，2013 年 10 月 30 日．

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

６．研究組織

(1)研究代表者
阿部　宏（ABE, HIROSHI）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10212549

(2)研究分担者
なし　　(0)

研究者番号：

(3)連携研究者
なし（0）

研究者番号：